



はじめに

伊万里市は、江戸時代に「千軒在所」と呼ばれるほど多くの白壁土蔵が立ち並び、国内はもとより長崎の出島を經由して遠く東アジアやヨーロッパ諸国、南米まで運ばれた肥前磁器「伊万里焼」の積み出し港として栄え、一方、大川内山では佐賀藩の御用窯が築かれ、国内最高の技術、意匠を用いて将軍家に献上する特別あつらえの「鍋島焼」を作り出すなど、本市は、現代まで続く伝統と文化が息づく肥前窯業圏の一翼を担う都市です。

今日では、臨海部を中心とした造船や半導体関連企業などの製造業の集積をはじめ、伊万里港におけるコンテナターミナルの機能強化に伴う東南アジアや台湾などとの国際物流の拠点化や市街地におけるIT企業の進出が進むほか、豊かな自然環境をいかし、伊万里ブランドとして高い評価を受けている伊万里牛や伊万里梨に代表される農業が基幹産業として地域経済を支えるなど、自然と産業が調和したまちとして着実な成長を続けています。

こうした中、平成31年(2019年)3月に、令和8年度までのまちづくりの指針となる第6次伊万里市総合計画を策定し、将来都市像である「人がいきいきと活躍する 幸せ実感のまち 伊万里」の実現に向け各種施策に取り組んできましたが、令和4年度末で前期基本計画が終了する



ことから、令和8年度までの4年間を計画期間とする後期基本計画を策定しました。また、直近の時流の変化に対応するため、基本構想の一部を改訂しました。

前期基本計画の計画期間であるこの4年間を振り返ると、全国の多くの自治体と同様、少子化の進行や若者の市外流出などにより深刻さを増す人口減少、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により大きく変化した生活様式への適応、激甚化し大規模化する台風や豪雨等の自然災害の発生、ICT等のデジタル技術の飛躍的な進歩など、本市を取り巻く社会環境は想定を超えて急激に変化しています。

このような中、人口減少に歯止めをかけ、九州西北部における活力創造拠点としての本市の持続的な発展を目指し、後期基本計画では、「いまりSTEP UPプロジェクト」と名付け、子育て支援、デジタル化の推進、産業の振興、港湾機能の拡充、さらにSDGsの推進を加えた5つの施策を政策の軸に掲げて各種施策に取り組むこととしています。

第6次伊万里市総合計画の基本理念である「時代に柔軟に適応し みんなで支え育てるまちづくり」のもと、従来にない柔軟な発想で地域課題に対応し、市民一人ひとりが心から幸せを実感することができる伊万里市づくりの実現に向け、地域や各種団体をはじめ市民の皆さまと一緒に取り組んでいきたいと思っておりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本計画の策定にあたり、市民アンケートやまちづくり市民会議などを通して貴重なご意見、ご提言をお寄せいただいた市民の皆さまをはじめ、熱心に議論を重ねていただきました市議会と市総合計画審議会の皆さまに、心からお礼申し上げます。

令和5年6月

伊万里市長 深浦 弘信